

# 心理学に対する期待及び大学の 専攻動機の変化過程に関する調査研究

The Expectation of Studying Psychology  
and the Changing Process of its Motivation

谷口（藤本）麻起子・金綱知征\*

Taniguchi (Fujimoto) Makiko and Kanetsuna Tomoyuki

## 要 約

関西圏私立四年制大学在籍の学生187名を対象とした『大学において「心理学」を学ぶことの期待』に関する質問紙調査、及び同20名を対象とした『大学の専攻動機と、その変化過程』に関する半構造化面接調査を実施した。心理学系学生は非心理学系学生に比べて、資格取得を心理学に期待する傾向や、他者の問題解決のための能力獲得を期待する傾向が示されたことから、心理学を学ぶことで臨床心理士をはじめとする対人援助職を志している可能性が推測された。一方面接調査において、「内的なもののため」という動機が心理学系学生にのみみられたことに加えて、「仕事のため」、「適性のため」という動機も、他者理解や他者援助が主軸として置かれていたわけではないことから、動機の側面からみた心理学への期待は他者理解・他者援助よりもむしろ、自己理解・自己援助のためといえた。考察では、これらの質問紙調査と面接調査の結果の矛盾について検討した。

**Key Words** : 心理学への期待, 大学・大学院専攻志望動機, 専攻志望動機の変化

## 1. 問題と目的

心理士の志望動機として松木（2006）は「おそらくあなたは、この仕事に就くしか、生き方が見出せなかったのであろう。こころの平和、それをこころの健康と言い換えることもできそうだが、それを手に入れたかったあなたは、それがミイラから生きた健康人になっていくための最善の手段であると、どこかで考えたのであろう。」と述べている。このように、自身の問題に関わるために心理士という仕事が選ばれることがある。しかし日本臨床心理士倫理綱領に「会員は、…自己が抱える葛藤等について十分に自覚した上で、専門家としての業務や活動を行う」（第1条4項）、「会員は…自分自身の個人的な問題が職務に影響を及ぼしやすいことを自覚し、常に自分の状態を把握するよう努める」（第1条5項）とあるように、心理士の個人的な問題は心理療法に多大な影響を及ぼす恐れがある。そのため「個人的な願望だけで心理臨床家になれるというのではなく、心理臨床家になることについて、本当に自分が必要と迫られているかどうかを考え」（河合, 2000）るプロセスを経た上で、教育分析を受けることが心理士には必要とされているが、実際には個人的な問題と心理士を目指すこととの関連は、どのように各個人に意識されているのだろうか。

\*金綱知征所属：甲子園大学心理学部

渡部ら(2001), 塩尻・福田(2005), 上野(2010)によると, 心理学専攻及びカウンセラー志望者にはいじめ被害経験者が多く, また過去の経験や自己にまつわる諸問題の解決を志望動機とする者が多いということが示されている。これらをふまえて筆者らはさらに問題を一歩進め, そもそも否定的経験が現在どのように捉えられているのかを調べる必要があると考えた。なぜなら, 否定的経験がどのように捉えられているかによって, 心理学に対する期待, 及び心理学を専攻することによる影響で異なってくると考えたからである。

否定的経験の中でも特にいじめ関与経験に焦点を当てた筆者らの研究(金綱・谷口, 2011)では, まず心理学系学生は非心理学系学生と比べていじめの被害経験をもつものが多かった。またいじめ被害時の感情について, 心理学系学生は「他の人をいじめたくなった」や「負けたくないと思った」など自己の外に向けた否定的感情を抱くことが有意に少なかった。逆に有意ではなかったが, 心理学系学生は「辛くて落ち込んだ」, 「学校が嫌になった」, 「死にたくなった」などの自己の内に向けた否定的感情を多く抱いていることがわかった。これらのことから, いじめ被害経験による傷つきが心理学専攻につながった可能性が示唆された。

また専攻志望動機について検討すると, 心理学系学生には「自己の否定的経験」, 「他者の否定的経験」, 「いじめ関与経験」など「経験」に関する動機が, 非心理学系学生の専攻動機と比べて有意に多かった。このことから, いじめ関与経験を含む自己の否定的経験が心理学専攻動機に深く関わっている可能性が示唆された。

さらにいじめ被害に対して現在の感情を尋ねたところ, 「勉強になった」という肯定的な回答が心理学系学生に有意に多い一方で, 「恥ずかしい」という否定的な回答は非心理学系学生に有意に多かった。このことから心理学系学生は, かつての否定的経験を心理学の学びを経て, 少なくとも表面的には肯定的に捉えるようになったと推測された。

しかしながらこれらの先行研究では, 否定的経験を抱くものがなぜ「心理学」を専攻するのか, あるいは数ある援助職の中でなぜ「心理士」を志すのかについては不明である。そこで筆者らは「心理学」を選ぶ背景には, 心理学が個人の問題解決に役立つと期待されているのではないかと推測した。工藤・鈴木・小林(2004)は, 心理学を学ぶ前の人文学部1回生に心理学の勉強への期待を尋ねたところ, 「人間に対する理解が深まる」, 「悩みを抱えた人の相談」と答えたものが52~72%いることを見出した。また「自分の悩みをうまく解決できるようになる」, 「本当の自分をみつけることができる」との回答も20%前後いることがわかった。この先行研究からは, やはり心理学に自他の問題解決が期待されており, かつ自分よりは他人の解決の方が期待されているということが推測される。しかし筆者らの研究(金綱・谷口, 2011)では, 心理学系学生の志望動機として, 「自己の否定的経験」を挙げた者は18.6%, 「他者の否定的経験」を挙げた者は11.2%と, 有意差はなかったものの, 自己の問題を挙げた者が多くみられた。そこで本研究ではあらためて心理学への期待を心理学系学生と, 心理学を専攻していない非心理学系学生とで比較して検討した。

ところで筆者らの研究は質問紙調査であったため, ある動機がどのように心理学専攻と結びつ

いていったか、そしてその動機が実際に心理学を学ぶ中でどのように達成されていくのかといったプロセスについてもわからないままであった。そこで本研究では、質的かつやり取りによって発見的な応答が期待される面接法も質問紙法とあわせて行うこととした。

以上のことから本研究では、1. 自己の否定的経験を解決する手段として心理学が選ばれることがあるが、ではそもそも心理学にはどのような期待がなされているのかを、心理学系学生と非心理学系学生との比較から検討すること、2. どのような動機が心理学専攻と結びつき、また心理学を学ぶことでその動機がどのように達成されていくのかについてのプロセスを検討することの2点を目的とした。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象者

本研究は上述した二つの目的にそれぞれ焦点を当てた異なる調査からなる。各調査の調査対象者は以下の通りであった。第一調査では近畿圏私立四年制大学心理学系学部・学科在籍の学生135名（男性69名、女性66名、平均年齢18.80歳）、及び非心理学系学部在籍の学生52名（男性13名、女性39名、平均年齢18.85歳）を調査対象者とした。第二調査では、金綱・谷口（2011）の調査対象者の中から面接調査への協力を承諾した関西圏私立四年生大学心理学系学部・学科・研究科在籍の学生12名（男性2名、女性10名）、及び非心理学系学部・学科・研究科在籍の学生8名（男性7名、女性1名）を調査対象者とした。

### 2.2 調査手法

第一調査では、無記名自記式質問紙を用いた質問紙調査を実施した。質問紙は工藤・鈴木・小林（2004）を参考に作成したものであり、「心理学を勉強することでどのようなことがあると期待していますか。」と教示した後、心理学への期待に関する18個の選択項目の中から当てはまるもの全てを選択するという複数選択式で回答を求めた。調査に用いた18個の選択肢は、表1参照のこと。

第二調査では、過去の否定的経験と専攻志望動機、及び専攻中の受講授業についての質問紙調査（金綱・藤本，2011）への回答を元に、個別半構造化面接を実施した。

### 2.3 手続き

第一調査では心理学系学部生と、非心理学系学部生を対象に質問紙を配布した。すべて授業時間内に配布し、回収については、その場で回答させ回収する方法と、質問紙は後日学内に設置した回収箱に提出してもらおうという方法の2つをとった。

第二調査では、金綱・谷口（2011）で使用した質問紙の最終ページにて面接協力者を募集し、協力が得られた学生を対象に、過去の否定的経験と大学学部学科／大学院研究科専攻志望動機との関連についてさらに詳しい聞き取り調査を実施した。

### 3. 結果

#### 3.1 第1調査：無記名自記式質問紙調査

質問紙調査においては、名義尺度による測定であることから質問紙で尋ねた18項目について、選択の有無と調査協力者属性（心理学系・非心理学系）の2×2のクロス集計を実施した（下表1参照）。また各項目における心理学系学生と非心理学系学生との差の有意性についてカイ二乗検定を用いて検証した。

まず自分自身に関する項目については、「自分の悩みを解決できる」のみ心理学系が非心理学系に比べ相対的に高い値を示したが、「自分の可能性に気が付ける」、「本当の自分が見つかる」、「新たな生き方が見つかる」、「自分の個性を伸ばせる」は、非心理学系が相対的に高い値を示した。カイ二乗検定の結果、いずれの項目についても両群の間に有意な差は認められなかった。

表1. 心理学への期待項目と心理・非心理学系とのクロス集計

			選択	未選択
自己に関する項目	自分の悩みを解決できる	心理学系	53 (39.3)	82 (60.7)
		非心理学系	14 (26.9)	38 (73.1)
	自分の可能性に気が付ける	心理学系	35 (25.9)	100 (74.1)
		非心理学系	18 (34.6)	34 (65.4)
	本当の自分が見つかる	心理学系	38 (28.1)	97 (71.9)
		非心理学系	21 (40.4)	31 (59.6)
新たな生き方が見つかる	心理学系	28 (20.7)	107 (79.3)	
	非心理学系	12 (23.1)	40 (76.9)	
自分の個性を伸ばせる	心理学系	26 (19.3)	109 (80.7)	
	非心理学系	11 (21.2)	41 (78.8)	
他者に関する項目	他人の考え方や性格が分かる	心理学系	60 (44.4)	75 (55.6)
		非心理学系	26 (50.0)	26 (50.0)
	他人とうまく付き合える	心理学系	71 (52.6)	64 (47.4)
		非心理学系	30 (57.7)	22 (42.3)
	悩んでいる人の相談にのれる	心理学系	86 (63.7)	49 (36.6)
		非心理学系	37 (71.2)	15 (28.8)
他人の行動を予測できる	心理学系	52 (38.5)	83 (61.5)	
	非心理学系	20 (38.5)	32 (61.5)	
社会や組織でうまくやっている	心理学系	66 (48.9)	69 (51.1)	
	非心理学系	22 (42.3)	30 (57.7)	
子どもの養育に関する項目	子どもの知的能力を育める	心理学系	25 (18.5)	110 (81.5)
		非心理学系	8 (15.4)	44 (84.6)
	子どもをうまく育てられる	心理学系	25 (18.5)	110 (81.5)
		非心理学系	11 (21.2)	41 (78.8)
人間全般に関する項目	人間に対する理解が深まる	心理学系	92 (68.1)	43 (31.9)
		非心理学系	33 (63.5)	19 (36.5)
	学習や記憶が容易になる	心理学系	13 (9.6)	122 (90.4)
		非心理学系	4 (7.7)	48 (92.3)
人間に対する科学的な見方ができる	心理学系	30 (22.2)	105 (77.8)	
	非心理学系	16 (30.8)	36 (69.2)	
資格に関する項目	心理学関係の資格が手に入る***	心理学系	68 (50.4)	67 (49.6)
		非心理学系	3 (5.8)	49 (94.2)
その他項目	特に何も期待していない	心理学系	8 (5.9)	127 (94.1)
		非心理学系	1 (1.9)	51 (98.1)
	その他	心理学系	6 (4.4)	129 (95.6)
		非心理学系	4 (7.7)	48 (92.3)

次に他者に関する項目については、「他人の考え方や性格が分かる」、「他人とうまく付き合える」、「悩んでいる人の相談に乗れる」、「他人の行動を予測できる」のいずれの項目についても非心理学系が相対的に高い値を示した。唯一、「社会や組織でうまくやっていける」の項目についてのみ心理学系が相対的に高い値を示した。いずれの項目についても両群の間に有意な差は認められなかった。

次に、子どもの養育に関する項目では、「子どもの知的能力を育める」では心理学系が、また「子どもをうまく育てられる」では非心理学系が相対的に高い値を示していたが、いずれの項目も両群の間に有意差はなく、また他の項目と比べても相対的に低い値であった。

次に、「人間に対する理解が深まる」、「学習や記憶が容易になる」「人間に対する科学的な見方ができる」など自己や他者を含む人間全般に関する項目については、先の2項目については心理学系が、残りの1項目については非心理学系が相対的に高い値を示していたが、いずれの項目についても両群の間に有意な差は認められなかった。

最後に、資格取得に関する項目である「心理学関係の資格が手に入る」については、心理学系が非心理学系と比べて相対的に高い値を示した。また、カイ二乗検定を実施したところ、両群の間に有意な差が認められた ( $\chi^2_{(1)} = 31.71, p < .001$ )。

### 3.2 第2調査 面接調査の結果分析による志望動機

結果の整理には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下、M-GTA と略す) を用いた。ただし本研究は予備調査であることから、志望動機及びその達成についてどのような特徴があるかを概念化した。また理論的飽和化には至っていないが、予備的検討として本調査で得られたデータを全て対象として分析を行った。

分析の結果、「内的なもののため」、「仕事のため」、「適性のため」の3つの概念が得られた (図1)。以下、個々の概念の説明とその具体例を挙げる。

#### (1) 内的なもののため

この概念の定義は「自己の感情・感覚を専攻する学問によって発展／解消しようとするもの」である。下位概念とその定義については「自己愛のため：自分にある特殊性を維持するため」、「辛さへの対処：内側に抱える辛さの軽減／解消のため」、「楽しさ：楽しいと感じられることができるため」であった。この「内的なもののため」は心理学系学生には10名みられたが、非心理学系学生にはみられなかった。「自己愛のため」の具体例を挙げると「クライアントさんであっても…いろいろ話きいていくというのは自分にとってプラスになることもあるだろうし…成長、発見、そういうところがあるのも魅力」(No. 1・心理学系学生) というものであった。また「辛さへの対処」は、「家族が統合失調症で…かなり悪くて…どうせこの先も(家族の)面倒みるんだし…自分で学んでみたらなんか変わるかな」(No.11・心理学系)、「楽しさ」は「アートセラピーで絵を…描いたんですけど…適当にわーっと描いているだけやのに、わかるじゃないですか、なんとなく、それがすごいなあって思って、楽しそうって」(No. 9・心理学系) が例として挙げられる。

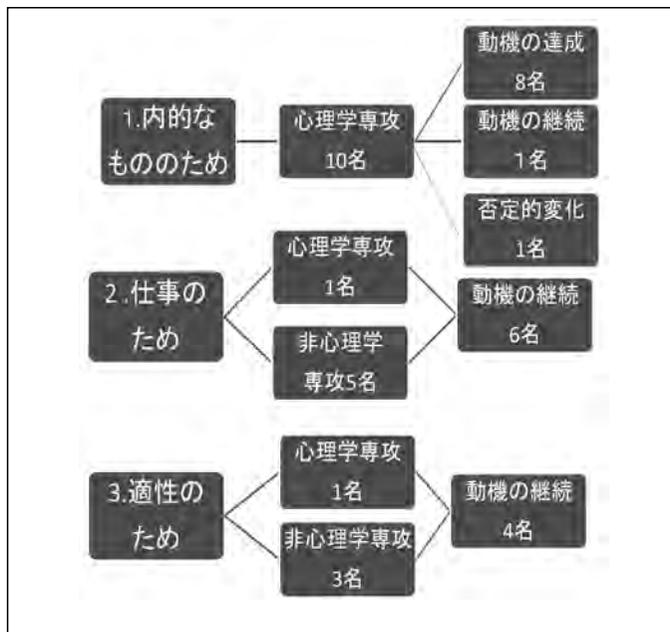


図1. 専攻志望動機と動機の変化に関する概念図

(2) 仕事のため

「仕事のため」は「就職や仕事に有利となる知識・技術の獲得のため」が定義であり、下位分類も「仕事のため」であった。この概念は心理学系学生に1名、非心理学系学生に5名みられた。具体例としては「(教師となるために) 経験がほしいからです。教える。…学校以外でも、教育学ってということで、外でできることっていっぱいあると思いますんで…それが、身につけたかった」(No.20・非心理学系)が挙げられる。

(3) 適性のため

続いて「適性のため」は「自分の適性を学問を通して発見したり、伸ばそうとするもの」が定義である。下位概念とその定義は「適性を生かす：はっきりと意識されているわけではないが、自分の適性に合っているため」、「自分探しのため：自分に合うものを探すため」であった。この概念には心理学系学生1名、非心理学系学生3名が含まれた。「適性を生かす」の概念は例えば「高校とか中学はずっと社会が、成績が良くて、日本史とかは、先生も好きで…楽しかったので、そういう点で」(非心理学系・No.18)があった。また「自分探しのため」は「医療狙ってたんだけどだめだったし、ほかは興味ないっていったんですけど…親がとりあえず受けろってことになって…学校がリストアップして…なんか転がり込んで。」(非心理学系・No.19)というものがあった。

3.3 面接調査の結果分析による志望動機の達成

次に、志望動機が実際の学びの経験を経てどのように変化していったかということに着目し

て概念を形成した。その結果、志望動機となったことが達成もしくは獲得された「動機の達成」、専攻志望動機となったことはまだ達成されておらず現在もその達成に向けて学んでいる途中である、あるいは学ぶ中でさらに動機の内容が確認・強化されていく「動機の継続中」、最後に動機となった内容が否定的にとらえられるようになる「動機の否定的変化」の3つが見出された(図1)。

「動機の達成」については、3.2で「内的なもののため—自己愛」の例で挙げた心理学系学生・No. 1の面接内容を見ると、「授業でも先生がおっしゃってたんですけど…セラピストの成長っていうのは面接やってよかったなあって…そう思ってもいいんだなっていう。そういうところはちょっと実感できたっていうか」というように、動機の内容が実際に大学で学ぶ中で達成できていると考えられるものであった。

「動機の継続中」については、No.20を再び例にすると、「自分の教える教科にもっと特化していきたい…あと教えるスキルをもっと磨きたいと思う」と、動機は完全には達成されておらず、現在も動機達成に向かっていていると考えられるものが含まれた。

最後に「動機の否定的変化」については「学校の中で相談をされる側で、聞く側で、そういうことにむいてるのかなと思って、心理学に興味をもって入ったんですけど…最近では向いていないのかなと思うところもあったりする」(心理学系・No. 2)というように、動機となったことが実際に学ぶ中で否定的な捉え方と変わっていくものが挙げられた。

動機と動機の変化の関係については、「動機の達成」は8名いたが、すべて動機が「内的なもののため」であり、心理学系学生であった。また「動機の継続」は11名いたが、動機が「内的なもののため」である者は1名、動機が「仕事のため」である者は6名、動機が「適性のため」である者は4名であった。また「仕事のため」、「適性のため」を動機とする者は全て「動機の継続」に含まれた。さらに「動機の否定的変化」については1名のみであり、「内的なもののため」を動機とする心理学系学生が該当した。

## 4. 考察

### 4.1 心理学を学ぶことへの期待について

心理学への期待については質問紙調査の結果から、自己理解や自己の問題解決などの自分自身に関わる項目、及び他者理解や他者の問題解決など他者に関する項目について、心理学系学生・非心理学系学生共に他の項目に比べて相対的に期待が大きいことが示された。逆に子どもの養育に関する項目、人間全般に関する項目については、心理学系・非心理学系共に、相対的に期待が小さいことがわかった。さらに他者に関する項目の方が、自己に関する項目よりも期待が大きいということも示された。このことは、心理学を学ぶことに関する一般的な期待が自己に関することよりもむしろ他者への関わり、すなわち、他者との良好な関係の形成・維持のための他者理解を促進するような、あるいは他者への援助を可能とするような知識・スキルの獲得などにより重点が置かれていることを示唆しているといえよう。さらにこれらの項目のいずれについても心理学系と非心理学系との間で有意な差が認められなかったことから、この傾向には心理学関連領

域を専攻する学生と、心理学関連領域以外の学問を専攻する学生との間に違いはなく、「心理学」という学問領域を学ぶことに対する一般的な期待といえそうである。

ところで、工藤・鈴木・小林（2004）では本研究とは異なり、人間全般に関する項目（「人間に対する科学的な見方」）が最も高く、次に他者に関する項目である「悩みを抱えた人の相談」が高いという結果が示されている。また江尻（1999）では自己及び他者理解に関する項目のみの質問紙であったが、結果は『他人』の心や行動や性格を知ることができるのを期待しているというよりはむしろ、『自分自身』のそれについて知ることができるのを期待している」というものであり、やはり本研究とは逆の結果が示されている。

これら先行研究と本研究の結果の違いの1つの要因として、本研究では「心理学関係の資格が手に入る」という期待が非心理学系学生と比べて心理学系学生に有意に大きかったことが挙げられよう。すなわち本研究の協力者には、他者理解のための知識やスキルを学んで資格を取得し、将来的に対人援助の仕事をするという流れが、心理学にイメージされやすかったのではないかと推測される。これは本研究の調査を行った大学が、心理学系資格取得を前面に打ち出した大学であったことも関わっているだろう。いずれにせよ本研究の質問紙調査では、他者理解・援助が心理学に期待されていたと考えられる。

しかし面接調査の結果をみると、心理学系学生にのみ「内的なもののため」という動機がみられ、かつその数も12名中10名と、相対的に多いものであった。つまり面接調査による心理学専攻に関する動機は、他者よりも自己のためといえる。

ではなぜこのような違いがみられたのか。その背景にはいくつかの要因が考えられるが、まず質問の仕方の違いが挙げられる。質問紙調査では「心理学への期待」という、心理学一般に関する問いであった。一方面接では協力者「自身」が、心理学に何を期待するかという問いの立て方であり、心理学について考える時の視点が異なっていたことによる影響が推測される。次に調査方法の影響も挙げられよう。あらかじめ与えられた選択肢から回答する質問紙調査と比べ、面接ではより自由な回答が可能であり、その分より自身の内面に照らし合わせた回答あるいは詳細な回答となりやすいため、自身に結びつけた回答が多くみられたと考えられる。さらに心理学を専攻する学生自身に2層の意識があるということも考えられる。つまり、より表層的な意識（＝質問紙調査で捉えられる意識）では他者援助、他者理解のための心理学と考えつつ、より深い意識（＝面接調査で捉えられる意識）では自分のための心理学と捉えられているのである。どちらも意識的な側面ではあるが、実は自分のために心理学を学ぶことが目的であるのに、他者のために自分は心理学を学んでいるということが、より強く意識されている可能性もあろう。最後に、他人の援助を通して、実は自分の問題について取り組みたいと考えている可能性もある。ただし本研究では質問紙調査と面接調査とで協力者が異なっているため、これらの考察はあくまで推測の域を出ない。今後は対象者を統一して検討する必要がある。

ところで金綱・谷口（2011）で得られ、また本研究でも仮定した、自己の傷つきの対処法として心理学を専攻すると考えられたものは、「内的なもののため—辛さへの対処」を動機とする

4名のみであった。この数は決して多い数ではないが、心理学系学生にのみみられたことから、心理学を学ぶことで自己の傷つきに対処しようとするという筆者らの仮説は、一部支持されたといえるのではないか。

## 4.2 動機の変化について

動機の変化については、「動機の達成」に至った者は全て心理学系学生で、かつ「内的なもののため」を動機とする者だった。このことから実際に心理学を学ぶことには、内的な問題になんらかの解決をもたらす作用があることが推測される。とはいえ逆に「動機の否定的変化」となった1名が、「内的なもののため」を動機とする心理学系の学生だったことも同時に考えると、心理学を学ぶことは決して内的な問題に解決をもたらすだけではなく、問題を深める側面もあると言えよう。心理療法には内的な問題をきれいに“なくす”のではなく、問題を“深める”ことによってその人なりの“こたえ”を出していくことが目指される。となれば本研究の結果から、心理学を学ぶこと自体には心理療法的な側面があることが推測される。また「内的なもののため」の下位概念として「自己愛のため」、「楽しさ」があったことを考えると、問題の解決とはまた別に、心理学には内的な充実感をもたらす側面があると考えられる。つまり心を扱う学問である心理学は、それを学ぶ人の心にも大きく作用するものがあるといえる。心理学は必ずしも学ぶ人自身の問題解決のためにあるものではないが、学生達の期待通りに、実際に学ぶ人に働きかける側面があるということは重要な点である。今後は実際にどのような心理学の側面が動機の達成につながったのかについて詳細な検討をすることが求められる。

また「仕事のため」、「適性のため」を動機とする者は、全て「動機の継続」となった。「仕事のため」については、仕事のためのスキル・知識を身につけることが動機であるため、その達成の目安になるのは就職してからとなるためであろう。また「適性のため」についても、本調査の結果でこの概念に含まれた学生は専攻が職業とセットになっているため、実際に就職しなければ動機の達成がされたと判断されにくかったからだと思う。

## 5. まとめ

本研究は①自己の否定的経験を解決する手段として心理学が選ばれることがあるが、ではそもそも心理学にはどのような期待がなされているのかを、心理学系学生と非心理学系学生との比較から検討すること、②どのような動機が心理学専攻と結びつき、また心理学を学ぶことでその動機がどのように達成されていくのかについてのプロセスを検討することの2点を目的として、質問紙調査と面接調査を行った。①については心理学には資格取得がより心理学系学生に期待されること、一般的に自己理解より他者理解が期待されることがわかった。②については心理学系学生は内的なものが動機となり、その動機が心理学によって達成されていくことがわかった。今後は心理学を学ぶ中で動機がどのように変化して達成されていくのかについて、他専攻とも比較しながら詳細に検討したい。

## 文 献

- 江尻恵子 (1999) : 心理学を学べば何がわかるのか—大学生の心理学観と、その心理学教育による変化— シオン短期大学研究紀要, 39, 51-59.
- 金網知征・谷口(藤本)麻起子 (2011) : 過去の否定的経験と大学/大学院教育に関する調査研究 (2) 甲子園大学紀要, 38, 125-136.
- 河合俊雄 (2000) : 心理臨床の理論. 岩波書店.
- 工藤与志文・鈴木健太郎・小林好和 (2004) : 大学生の心理学に関する「素朴概念」—本学人文学部生を対象にして— 札幌学院大学人文学会紀要, 76, 1-16.
- 日本臨床心理学会第7期倫理委員会 (2009) : 倫理ガイドライン. 日本臨床心理士会.
- 松木邦裕 (2006) : 思わしくない仕事でのこころの健康 臨床心理学, 第6巻5号, 584-589.
- 塩尻智也・福田広 (2005) : カウンセラー志望者の志望動機について—自我同一性, 過去経験及び進路選択からの分析— 山口大学教育学部附属研究実践総合センター研究紀要, 第19号, 103-109.
- 上野まどか (2010) : カウンセラーを志望する大学院生の動機と臨床実践で感じる困難との関係 明治学院大学大学院心理学研究科 心理専攻紀要, 第15号, 9-26.
- 渡部瑞恵・東海林則子・椿堂由紀 (2001) : 心理カウンセラーを志望する大学生のパーソナリティ特性の検討 —援助規範意識との関連から— 明治学院大学文学研究科 心理学専攻紀要, 第6号, 15-23.